博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　山口　裕之　印

学位申請者　許金菁

論　文　名
Italo Calvino nella letteratura mondiale: la ricezione in Cina e in Giappone
世界文学の中のイタロ・カルヴィーノ－中国、日本における受容から

審査の結果

本論文は、共同指導共同学位制度に基づき、すでにトレント大学において最終試験が公開審査として行われ、博士号授与にふさわしい学術的価値をもち独創的な成果である旨、トレント大学最終試験報告に記載されている。この結果をもとに、2017 年 8 月 18 日、本学において、東京外国語大学側の最終試験を行った。和田忠彦名誉教授、林和宏准教授、松浦寿夫教授、青山亨教授が審査委員を、また山口裕之が主査を担当した。

最初に、本論文執筆者の許金菁（キョキンセイ）氏から、論文の概要が報告され、続いてトレント大学での最終試験に参加した和田名誉教授から、同大学での審査報告があった。その後、審査委員による質疑応答が行われた。

本論文は、20 世紀イタリアの作家イタロ・カルヴィーノの日本と中国における受容を検討することによって、カルヴィーノの文学を「世界文学」という視点からとらえようとする試みである。この論文の独自な点は、その比較文学的アプローチにおいて、日本と中国という二つの視座が据えられ、その対照性のなかで「世界文学」の作家としてのカルヴィーノの姿を浮き上がらせようとしていることにある。またここでは、それぞれの文化圏での受容史に関する考察が進められているだけではなく、作家の王小波と芸術家の荒川修作とカルヴィーノとを対峙させるという緊張感を孕んだ叙述が、この論文に独自の意義を与えるものとなっている。

こういった論文に対する評価、および質疑応答における評価から、本審査委員会は許金菁氏によって提出された論文が、博士学位授与にふさわしい業績であると全員一致で判断した。

論文の概要

本論文は、20 世紀を代表するイタリアの作家イタロ・カルヴィーノ（1923-1985）の日本と中国における受容について、比較文学研究において新たな文脈で見直されつつある「世

界文学」の概念に照らして考察することによって、いわゆる「ポストモダン作家」としての作家の位置づけの再検討を企図した研究である（ちなみにカルヴィーノを対象として日中両言語圏における比較受容研究を行った最初の本格的論文である点も特筆すべきであろう）。

以下に本論文を構成する4章それぞれについて概要を述べる。

第1章　世界文学、過去と現在

作家を「世界文学」の文脈において捉え直すために、論者はまず、「世界文学」の概念史をたどる。ゲーテの提唱した“Weltliteratur”から始めてマルクスとエンゲルスによる再検討を経て、19世紀以降20世紀全体にわたり比較文学研究においていかなる変化と進展が見られたかを概観する。なかでもイタリアにおける2人の理論、哲学者クローチェと比較文学者チェゼラーニのそれに着目する。そのうえで「世界文学」理論の展開に大きな影響をあたえた4人の著作を詳細な検討に移る。すなわちエドワード・サイード『オリエンタリズム』、フランコ・モレッティ『遠読』、ガヤトリ・スピヴァク『ある学問の死』、ディヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か？』をめぐって、それぞれの限界を指摘する。

第2章　世界文学の中のカルヴィーノ：中国と日本における受容

ここでは、両言語圏における作家の受容をめぐる歴史と様態が何故第1章で検討した「世界文学」の比較文学的展開と密接に関わる問題系であるのかが、まず第一部において検討される。その理由として、論者は、作家のテクストが原語か翻訳かを問わず、つまり言語や国境を越えて、多様な学問・芸術領域に継続的に影響をあたえている作家の思想と作品の普遍性にあることを指摘する。次いで第二部では、日中両言語圏におけるイタリア文化全般の近代化に伴う受容状況を、日本そして中国の順に詳述しつつ分析していく。開化期に端を開き、大正・昭和初期の多様化と深化を経て、日独伊三国同盟期における国策による昂揚期と敗戦による束の間の停滞、その後の変遷を現在にいたるまで、質量双方の観点からも分析することで、現在の到達点を確認する。同様の手法で、中国における受容史について、一般的な西洋文化・文学の受容と同様、三度にわたる高揚期が認められる。つまり五四愛国運動（1919年）に端を発する外国語文学翻訳の黎明期、次いで人民共和国（1949年）から文化大革命運動（1966年）に至るまでの古典文学及び共産主義・リアリズム文学の翻訳紹介期、そして最後に開放改革期における翻訳の多様化時代である。以上の両国における受容史とその分析を踏まえて、第三部では、両国のカルヴィーノ受容をめぐる比較考察に移る。作品の翻訳出版状況、批評的言説の変遷について、具体的かつ詳細な分析が為されたのち、あらためて作家を「世界文学」の文脈において位置づけることの妥当性が確認される。

第3章　王小波と荒川修作：二つの受容のストーリー

ここでは、カルヴィーノ受容の多様性と深化を確認できる優れた具体的例として、作家

王小波と芸術家荒川修作を採り上げ、両者の作品において、カルヴィーノがどのような影響の痕跡をとどめているかが分析される。

文化大革命のトラウマを描いた「傷痕文学」の旗手として知られる王小波は、カルヴィーノを師と仰ぐと公言しているが、論者は、ふたりの作家にみられる共通点と影響関係を、四つの主題（幻想文学性、アイロニー、軽さとしての文学、ユートピア/ディストピア）に即して分析することによって検証している。次いで荒川修作については、その身体性と精神性をめぐる探究の軌跡と死生観に、カルヴィーノの思想との類似点を見いだすべく、王小波同様四つの主題（ユートピア/ディストピア、芸術の臨界点、五感/六感、二元論/一元論）に即して分析検証が為される。

こうして、ふたりの作家・芸術家にみるカルヴィーノの影響の差異と共通点を確認したのち、論者は、作家の作品と思想自体にそうした結果をもたらす多様性と深さがあること、そしてそれがそれぞれの言語圏における翻訳受容の現状を反映していることを確認する。

第４章　結論

ここでは、第１章から第３章までの各章が論文全体においてどのような有機的連関を有するのかが、論者の意図を明示しつつ述べられる。4・1から4.4までは、日中両国におけるカルヴィーノ受容の状況分析に照らして、第１章で検討されたサイード、スピヴァク、ダムロッシュ、モレッティの「世界文学」をめぐる理論が、それぞれの差異を明らかにされながら再考察されたのち、論者の立場は、「読み」と「流通」の様態として「世界文学」を捉えるダムロッシュの理論に近いことが述べられる。ダムロッシュの言う、翻訳によって豊かさを増す「世界文学」の系譜にこそ、カルヴィーノは連なる作家であり、それゆえその受容の様態やその歴史もふくめ、わたしたちは「カルヴィーノ文学」とよぶのであるとの主張が展開される。

この点を踏まえて4.5および4.6では、カルヴィーノの受容における「ポストモダン」をめぐる問題が検討される。論者は、中国においてカルヴィーノが（イタリアにおける位置づけとは無関係に）つねに「ポストモダン作家」と見做されている理由は、同様な位置づけをするアメリカの影響を蒙ったことにあると指摘し、その具体的言説を確認する。そのうえで論者は併せて、カルヴィーノをめぐる批評的言説の日中両国における差異が、イタリア研究者の量的質的差異に起因することも指摘確認している。

そして最後に4.7において、本論文の到達し得なかった諸点について分析がなされ、それを克服するための今後の研究課題と展望が述べられる。

論文の評価および最終試験の概要

この論文は、すでに述べたように、比較文学的なアプローチにより、中国と日本という二つの視座からカルヴィーノの受容を検討し、カルヴィーノの文学が翻訳を通じて新たな

文学的力を獲得していくという意味で、ダムロッシュの「世界文学」の概念に連なるものであると位置づけるものである。その独創性を審査委員一同でまず確認した。また、第３章で取り上げられた二人の作家・芸術家のうち、荒川修作をカルヴィーノと結びつけるその論じ方に対して、関係性の提示の仕方が十分ではないのではないかという指摘もなされたが、王小波とカルヴィーノを論じた箇所については、その独創性と意義に対して高い評価が与えられた。

審査委員による質疑応答では、第１章での「世界文学」の概念をめぐる理論的連関、第２章で中国と日本という二つの受容史の視座を与えたことの方法的意義、第３章についてはとりわけ荒川修作とカルヴィーノを関連づけることの妥当性などについてあらためて問われ、許氏はそれらの一つ一つに対して、自らの見解を丁寧に説明していった。

審査委員会では、トレント大学での最終審査の際にも指摘されていた、各章のより有機的な繋がり、第３章での荒川修作の扱い方、「世界文学」の概念をめぐる４人の理論家の言説の提示の仕方など、今後向き合っていくべきいくつかの課題を再確認することになったが、全体としては、これもトレント大学での評価と同じように、本論文が独創性と高い学術的意義を備えた研究であるということが審査委員の一致した意見であった。よって審査委員会は、全員一致で本論文を博士の学位にふさわしい重要な学術的成果であると判断した。